

学術図書館研究委員会(SCREAL; Standing Committee for Research on Academic Libraries)は、2007年10月から11月に、国立大学図書館協会、公私立大学図書館コンソーシアム(PULC)、日本原子力研究開発機構の協力のもと、電子ジャーナルおよび学術論文の利用に関する調査を実施し、2,890の有効回答を得た^注。

<結果の概要>

- ・化学、生物学、医歯薬学の分野では、半数以上が電子ジャーナルを「ほぼ毎日」使っている
自然科学系（化学、生物学、医歯薬学、数物系科学、農学、工学）では、9割以上の回答者が電子ジャーナルを「月1回以上利用」と回答している。また、化学、生物学、医歯薬学の分野では、半数以上が「ほぼ毎日利用」と回答している（図1参照）。
- ・人文社会系でも電子ジャーナルの利用者は2001年調査の4倍以上
人文社会系における電子ジャーナルの浸透度は自然科学系ほどではないが、月に1回以上使っている回答者の割合は、16.5%（2001年国立大学調査）、31.0%（2003年、同調査）、68.2%（今回調査）と年を経るごとに伸びており、順調に浸透していることがわかる（図2参照）。
- ・利用は年齢による差がほとんどない
20歳代の回答者の42.1%は電子ジャーナルを「ほぼ毎日利用」と回答しており、他の年齢層よりも高い割合を示している。しかし週に1回以上で見ると、20歳代79.6%、30歳代76.6%、40歳代73.9%、50歳代74.3%、60歳代59.7%となっており、20歳代から50歳代までは大きな差はない。
- ・電子的な文献は、電子的に発見される
「もっとも最近読んだ論文をどのように発見したか」という質問に対して、半数が「抄録／索引データベースから」と「電子版雑誌から」と答えている。とくに生物学、医歯薬学では前者の回答だけでそれぞれ45.7%、46.4%と他の分野に比べて高くなっている。人文社会系では「抄録／索引データベースから」と回答したものの割合はこれほど高くないが、よく使う二次情報データベースとしてはCiNiiが一番多く挙げられている。
- ・e-bookの利用も今後期待される
e-bookサービスは、現状ではほとんど使われていない、あるいは知られていないが、「今後ぜひ使いたい」「できれば使いたい」と回答したものは最も割合の低い人文学でも51.2%であり、導入がすすめば利用される可能性は高い。

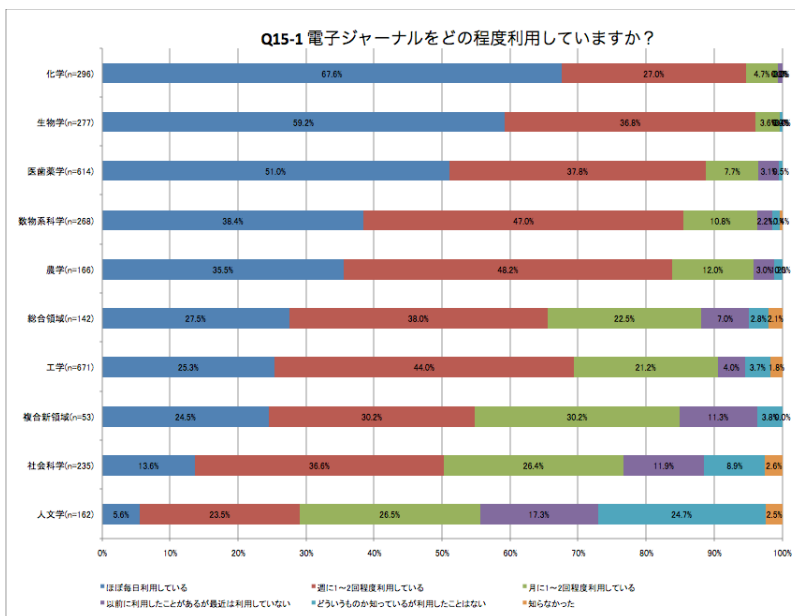


図1: 電子ジャーナルの利用状況

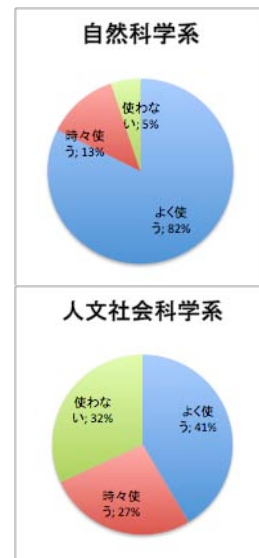


図2(1): 電子ジャーナルの浸透度 SCREAL2007年調査



図2(2): 電子ジャーナルの浸透度 国立大学2001年調査

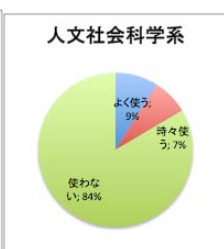


図2(3): 電子ジャーナルの浸透度 国立大学2003年調査

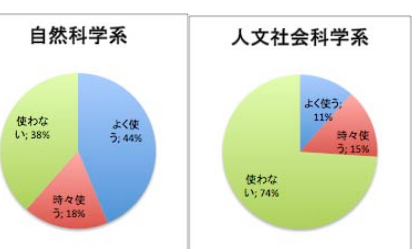
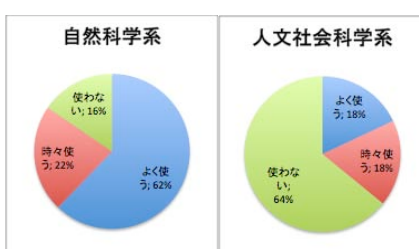


図2(4): 電子ジャーナルの浸透度 PULC2004年調査

注) 調査対象は国内25機関(北海道大学、東北大学、筑波大学、千葉大学、東京大学、東京工業大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、大阪市立大学、関西大学、関西学院大学、慶應義塾大学、中央大学、東海大学、同志社大学、法政大学、明治大学、横浜市立大学、立命館大学、早稲田大学、日本原子力研究開発機構)の研究者および博士後期課程の大学院生であり、Web方式によるアンケートを行った。